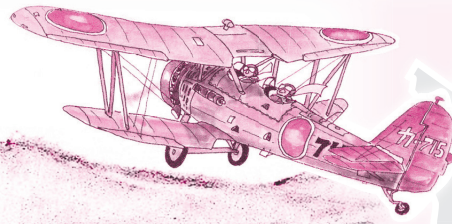


# 予科練 平和記念館だより



予科練平和記念館整備推進室では、予科練や海軍に関するお話しや写真を集めています。ご存じの人はぜひご一報ください。

## ●翼なき予科練

（先月号のつづき…）。昭和19（1944）年に予科練習生となった森田辰徳さんは、長崎県の大村海軍航空隊で特別攻撃隊の飛行機の整備をする事になり、次々と飛び立つ隊員を見送り続けました。）

◇ ◇  
昭和19年のころは日本がとても苦しい時期だと思いましたが、そうした実感はありませんか？

「…まあありましたね。2回ほど大村湾から飛行場まで、爆弾がダーっと落とされたんです。そのとき、飛行場にいた連中が「回避！」って言われて、全部潮がひいていたので飛び降りて海の中に入っちゃったんですね。そして今度は海の中から（落とされた）爆弾が破裂したもんだからたまたまつけられて…。もちろんそのとき死んだ人もたくさんいましたけどね。死んでぶかぶか浮いてる人もいましたけどね。まあああいうときはほんとに、つらいというか、なんともいえない、表現しようがないって感じでしたね…。」

昭和20（1945）年4月に入ると、森田さんたちは山の中のトンネルで飛行機の部品整備の仕事をすることになりました。爆撃を受ける平地の飛行場ではなく、山間を整理して飛行場にしてきたからです。そしてとうとう8月6日広島に、ついで9日には長崎に原子爆弾が投下されました。午前11時2分、長崎市上空でB29がプルトニウム型原子爆弾「ファットマン」を投下したそのとき、森田さんは爆心地から直線距離で40〜50kmほどのところにいました。

「…広島島のときは、それこそ話は聞きましたけどね。長崎はちょうど休憩してるんですよ。なんか曇ってもないのに光ったんだよね。稲妻にしちゃおかしいなって感じだったんです。天気はいいし。そして、光って、ちよつとしたらドーンって音がしたんですね。だれが言い出したか知らないんだけど、「艦砲射撃だ！」っていうわけですよ。「みんな回避！」ってことで壕のほうへ走っていったら、向こうから白い雲がすーっとこっちにきたんですね。ああ、あれなんだろうって言いながらトンネルへ入っていったら、その後なんにもないから、そろそろつと表へ出たら、きこの雲があった、というわけなんです。」

◇ ◇  
8月15日の玉音放送はお聞きになったのですか？  
「私は作業をやってて行けなかったんです。戦争は終わったんだということを後で聞きましたよね。もちろんあの、負けた悔しさもありましたよね。それこそ勝つんだと思って一生懸命やってきたわけですからね。と同時に、あ、これで帰れるなという気があったよね。なんか喜びっていうか嬉しさが、やっぱりそういうものがありましたよね。とにかく前年の6月に（予科練に）はいつてそれっきり家へ行つてませんからね。」



▲現在の森田さん

このとき17歳と5か月、今でいえば高校生の年齢でした。満員のため機関車の上に乗って復員してきた森田さんをお父さんは「ああ、よく帰ってきた」と迎えてくれましたが、お母さんは無言で泣いていたそうです。戦後は同郷の友人とともに上京し、警視庁へ入庁。以来40年定年まで勤め上げ、現在は二人のお子さんとお孫さんにも恵まれて、阿見町うずら野に居をかまえて悠々自適な毎日を送っています。

「…確かにつらいこともありましたよね。あるけれども、しかしどこにだって楽しいことばかりではないですからね。何やったつてつらいことはどこにでもありますから。そういうことをわきまえて、我慢するところは我慢しなくちゃならないだろうというふうに思いますね。…とにかく、戦争だけはしないような方向へもつていってほしい。難しいことだけれども、そういうことは絶対にしてはならないと思いますね。」

80年の重みを持たせ、まるで寒さに耐えて花を咲かせる梅の古木のような言葉だと思えました。皆さんも寒さに負けずに、どうぞよいお年をお迎えください。